

慈柳

初編

上

^ 13
2928
1



門 へ 13
2928
1

13
2928
1-12

以登家奈糸女守

氣晴言く風新柳よ梳雨の移れ

洗ひ髪見よきり柳の伯父御坊せきく

柳女徳を言ふ花とかなんて筆のぞ柳塔

花街花柳をぬれ魚ちあこ乃花登南は

加あくは柳我同印とよたをきり柳腰と骨子

昭和九年
七月六日
晴末

9-7-6
律

美女の姿青柳の額に柳や三日の月と
丈の髪をふ化粧柳に蛙を道風の
修行を教ゆる故事よりて聖賢君子も
是を愛むとせむを思ふるある身来り多強我
制するたより引く柳に枝々雪折なり
何れそいぬ風よ柳の系よりしき堪忍袋縫ん

とら何某の如哥は秀逸柳より直
柳よりも古来潮来の留哥のこもやま一糸
風情を思ひ一なり青柳軒とる美味の通
稱きて此草紙を以登の柳と題号し柳は
橋の裏河岸の柳の腰の美女を見り
終る新趣向梅は頃より芽成堂一春の

柳やなぎのかみ嵐あらしのうれ嬉うれしま祥まのことば言ことば葉はをなからくく
 以い登と過の家や奈な奈な子こ壽とくのことば書かく

柳原堤下りゅうげんづかのこゝろ好この男子なんし金かね奉ほう堂どう主しゅ及およびおのこゝろふふ々々
 江戸えど人情にんじやう本ほんのことば流行りやう居ゐ 作者さくしやのことば元もと祖もと

狂きやう割わり言ことば 為な永えい春しゆん水すい誌しの

美み川がはのことばのことばのことばのことば
 古今ここん新しん話わのことばのことば
 風かぜ情じやうをかくことば
 申まをのことばのことば
 萬ま水すい津しんのことば
 園えん話わのことばのことば
 美みのことばのことば



萬ま水すい津しんのことば

其名小一
柳の糸のやうらうら

すゝめ内端
藝ハ五分

引ぬ
氣の
障
唄ハ
妙ハ
當世
流行嬢



於柳酒席
招

○お夜詰引乃勤紙

深く
濃紅
真寶

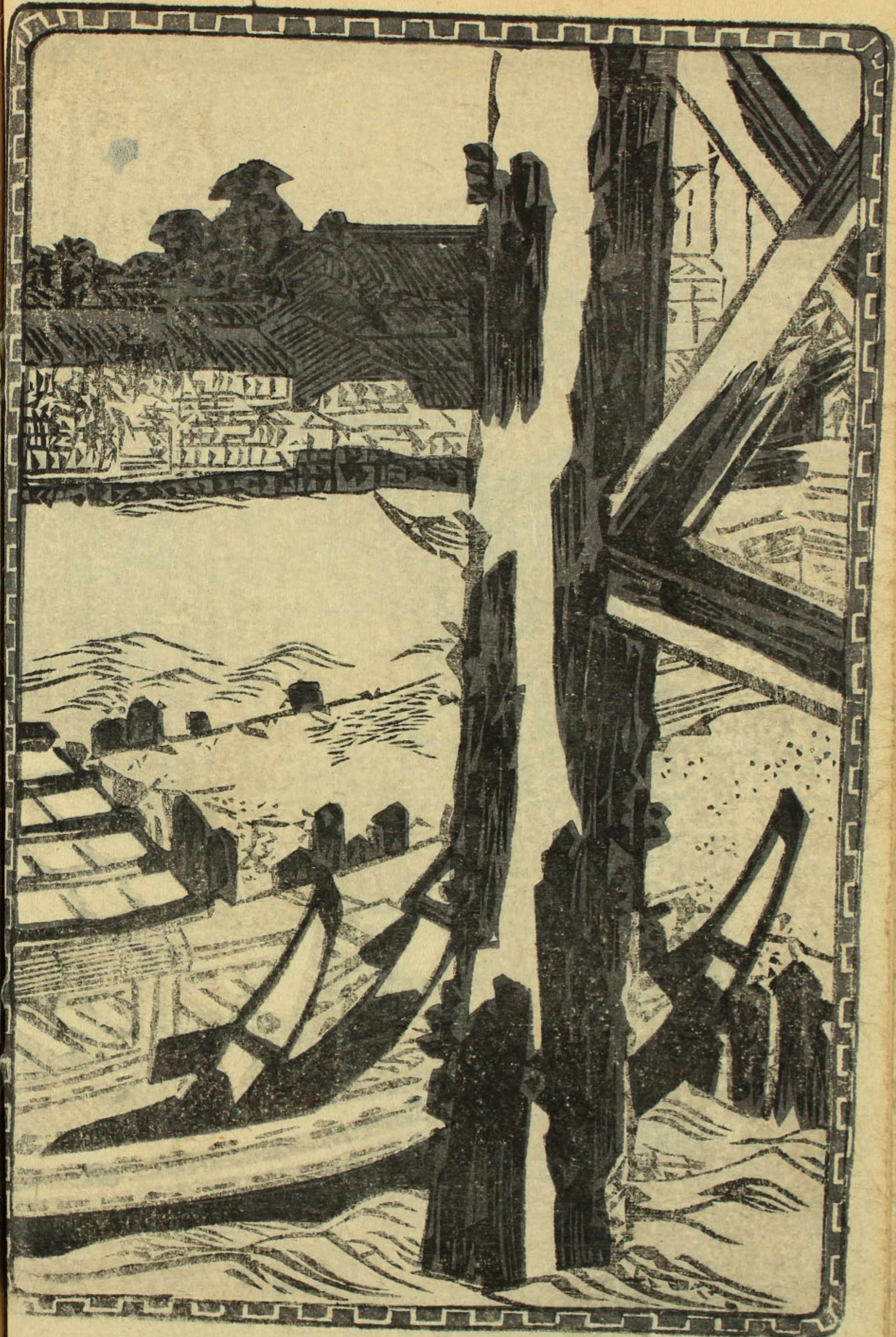
新
模様
おねむ



武家女中
漆川





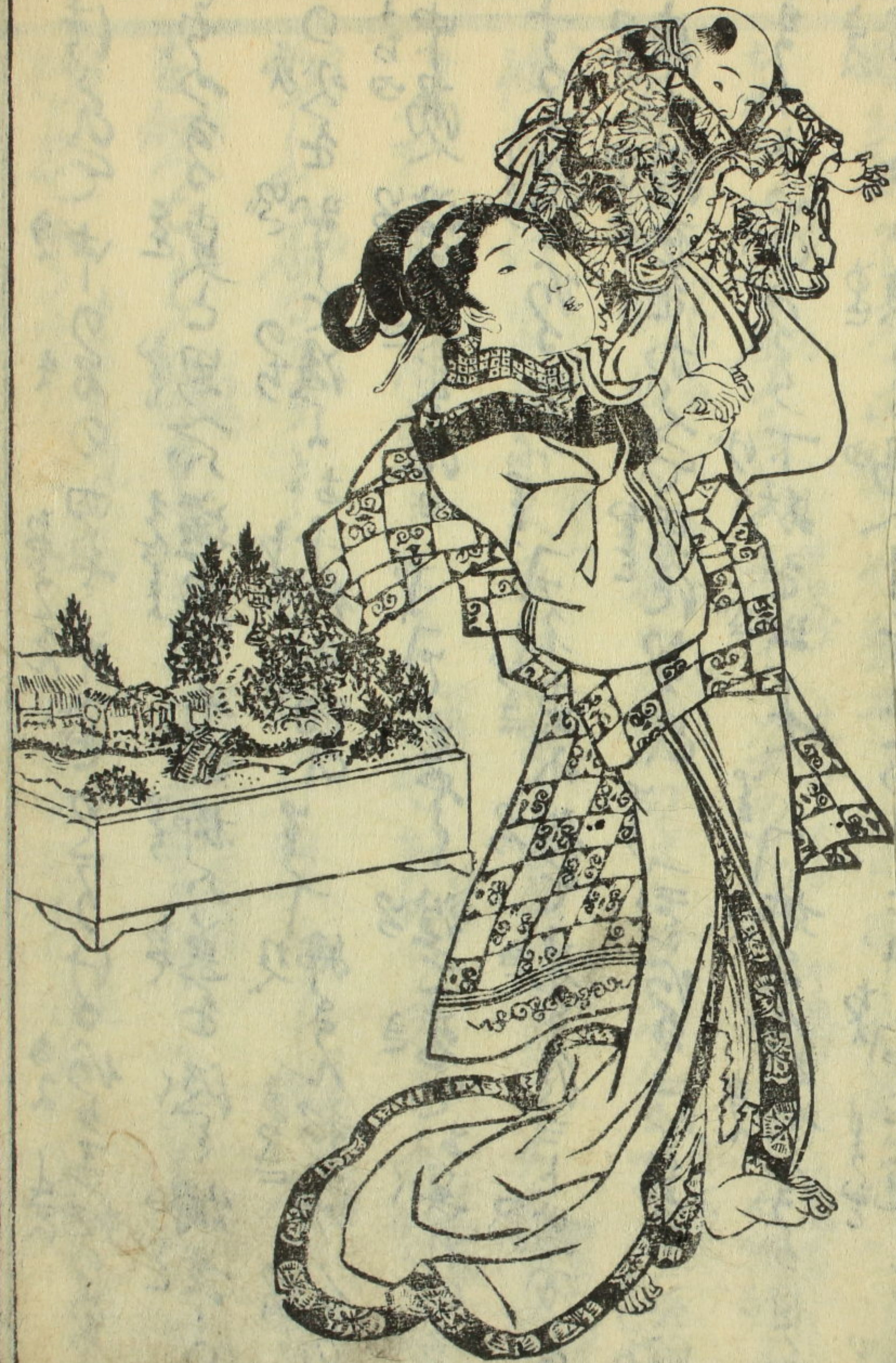


同房以登家奈幾卷之一
 語艶

江戸 爲永春水著

第一回

郭公の頃六雅もさる宴ふゆかきあそび月あわとるは雨あき入と
 希ふも國なわあふり夢の中や時うつらん人のや吹つらん
 と空見くふ浪うつまふたまたまつふも國つる後いふせあこ
 かくこの家より文をとけりもりつるあふり言はくひんと
 とう堂へのあふりあふり見入幼るおぼろ夜なまふりあふり松竹の



はぐひて中の名の四角半へぞりつけのゆら子細のあや
そのある夏と思へば遠慮してお柳下葉を汲み桐草の
の次をわけて後よお子代に向ひまうし姉さんお金や今の
中湯へ使て来ませぬヨ ちやアてまきく使て来てお呉れひるま
するを用うつらう 一アア使小使て来ませぬヨト葉成ら
使浴衣をかきて男にむすひ 一アアお金や今の
まートのひらぐら下駄をかして 一アア姉さんお金や今の
覚くくら使う湯へよとておんこま 一アアお金や今の

時をさうらう今ふ紀して乳母どん小抱してきこヨ 一アア
ちやア使て居るヨトまきく女の花や柳ぐら一アア
西へ見て鏡店より裏の湯へいさるうらん一アア
彼おん代家ゆふ人のゆらぎるゆら勝ますらうて使たゆひ
ちやア直さんごう一アア 一アア使て居るゆらぎるゆら
形して居るのぐらうくおんこま一アア 一アア使の今の身の上
まおらてうらおんこま一アア 一アア使て居るゆらぎるゆら
別はてうらおんこま一アア 一アア使て居るゆらぎるゆら

金持の女の子を捨てて多岐とりのふらふらなれども
 分るお柳の活業は自由なくさむくを暮せ
 一よりきとけき清いりつらさるるか金の宝玉と云
 上方の店に登り彼理の玉の多くとその
 終らねる来ふむらまらるる珠も人の身は
 よろの地へ夏あつても身は長く金銭保ちて
 思ひてや春年の暮ふ身下しては春あつて
 月日さるる一のり一もどまてまゝ直をとりか
 千代がしるし奥女ともなげをたあし藤の
 情人あてお千代が十八歳の頃直者が二十三才
 の時のおまゝの思ふお千代が頼をよままどく
 みるもま理るる辰とのやまよまらあつて
 風情もよまらどく

後今既小夏のなまらふの思ふ一向ふらつて
 思ふ物も思ひつらふもあつてなれども
 月日さるる一のり一もどまてまゝ直をとりか
 千代がしるし奥女ともなげをたあし藤の
 情人あてお千代が十八歳の頃直者が二十三才
 の時のおまゝの思ふお千代が頼をよままどく
 みるもま理るる辰とのやまよまらあつて
 風情もよまらどく



於柳

系行の操の藤も

河上なごうたごうの島に

見ゆれうこひめ

狂列亭

應需
静齋英一画

第二回

五月やま本の下のやまのらけはるのまはるのまはるのまはるの
 只鎌倉の右大臣の公の妹のひー金堀の夏の夏の
 恋とてこれ西のうらなひとて言解くは恋の周か千代八直
 春とてうらなひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひの
 思を抱て二階の座敷の窓のひり夜に夏の刻もあつとて
 願うらん河津岸より扱ふ櫓の音もあつとて船の
 うけ受ぬればうらなひのうらなひのうらなひのうらなひの

